

書評

上島国利, 樋口輝彦, 野村総一郎, 他 編
気分障害

佐藤光源

気分障害圏の病気で苦しんでいる人は多く、なかでもうつ病患者は約 300 万人と推定されている。それに双極性障害やいわゆる神経症圏のうつ状態、気分変調症などを加えると気分障害圏の患者数は膨大で、しかもその多くが未治療のまま苦しんでいるのが現状である。国民の健康寿命を損なう代表的な原因疾患がうつ病であることが WHO 健康レポート (2001) で明らかにされ、わが国で毎年 3 万人を超える人が自殺していることも、気分障害がいかに大変な病気であるかということをよく物語っている。しかし、今では薬物療法と心理社会的療法を組み合わせた治療法が長足の進歩を遂げ、完全な回復を期待できるようになっており、気分障害に関する適正な知識の普及啓発と最適な医療の推進による患者の救済が急がれている。

そうしたなかで、“気分障害のエンサイクロペディア”を目指した本書が上梓された。そこには、読者が知りたいと思う諸問題がいまどこまで解明され、何がまだ解明されていないのか示されており、気分障害に関するアップデートな情報が豊富に盛り込まれている。

本書が、各論を含めて特定の診断システムにこだわっていないことも特色の一つである。日本では ICD-10 や DSM-IV-TR などの疾病分類や診断統計マニュアルが翻訳されるたびに疾患概念が変わったり、新たな訳語が登場しては伝統的な精神医学用語が混乱したりしていて、気分障害もその例外ではない。それを、たとえばうつ病の疾患概念を統一しようとするようなことはしないで、本書におけるさまざまな気分障害関連用語の使い分けの原則を冒頭で整理したあと、気分障害の全貌を浮き彫りにすること

に努力が払われている。そこが、本書が“気分障害のエンサイクロペディア”といわれるゆえんでもある。

本書は 680 頁からなり、総論 (8 章)、各論 (11 章)、臨床上の諸問題 (7 章) の 3 部構成になっている。総論には、概念の変遷、病因、疫学、症候学、診断・分類、治療、経過・予後だけでなく、基礎研究と社会・文化的問題が含まれ、各論では、大うつ病性障害、気分変調性障害、双極性障害、気分循環性障害、ラピッドサイクラー、混合状態、非定型うつ病、季節性うつ病などについて、それぞれの歴史や概念、診断、病態、治療などが最新の知見をもとに解説されている。第 3 部では、難治性うつ病、軽症うつ病、自殺、併存、ライフサイクル、一般医・コメディカルとうつ病診療、職場のメンタルヘルスなどという臨床に即した話題が取り上げられていて興味深い内容となっている。

今年 5 月にお台場で開かれた日本精神神経学会総会には、学会専門医制度が始まったこともあって史上例をみない多数の精神科医が参加した。書籍の展示販売コーナーも随分混み合っていたが、一段と注目を集めていたのが本書であった。うつ病の疾患概念や病態の理解が操作的診断法によって揺らぐなか、気分障害の全貌を見直し、医療の実践に役立てたいという多くの精神科医の思いを反映したのであろう。そうした意味でも期待に応えるエンサイクロペディアであり、臨床家の座右の書としてぜひ推奨したい一冊である。

(東北大学名誉教授)

●B5 680 頁 2008 定価 16,800 円 (本体 16,000 円+税) 医学書院